

【論 説】

専門性の擁護

－科学技術の民主化のために⁽¹⁾

木 原 英 逸

目 次

1. テクノクラシー論とその混乱
2. 信頼すること
3. 専門家システムへの信頼
4. 民主的であるために

いま、ひとつの観念がこの社会を覆っている。科学技術者をふくむ専門家への不信である。たしかに今、我々の社会がさらに民主的になることを目指すのなら、専門家の現状のあり方は変わらねばならないし、また変えなければならない。そこに一点の疑いもない。⁽²⁾しかし当然のことであるが、このことは、専門家システムへの信頼を否定し、専門家システム自体を否定してゆくことではない。社会が民主的であることと、専門家システムを信頼することとは、なんら対立するものではないのである。にもかかわらず、両者を対立させて不信を煽ったり、両者の区別を曖昧にすることによって結果的に不信だけを助長したりする議論が、ときにポスト近代論の名も借りて繰り返されている。⁽³⁾しかし今、我々がなすべきこと、また実際なそうとしていることはそんなことではない。事実をよく見なければいけない。それはむしろ、どの様に専門家システムを組み直せばそれに依って我々の間での社会的信頼関係を民主的な形で維持してゆけるか、その試みなのである。もとよりそれは、いわゆる専門家が情報をコントロールし、そうした不十分な情報を提供することで、いわゆる非専門家である人々の理解、信頼を取り付けようとする、少なくとも従来のパブリック・ア

専門性の擁護（木原）

クセプタンスの試みを言うのではない。かといって、逆に、専門家に少しでも多くの情報公開を求める一方で、そうした情報を理解できる少しでも多くの能力、リテラシーを非専門家である人々一人ひとりがもち自己決定権を確保することによって、直接、専門家の活動に介入しそれをコントロールすることをめざすことでもない。

では何なのか。議論の混乱を正すにはその前提を再検討する必要がある。専門家システムへの不信とは、すべての専門家を信頼しないことである。しかし事実としてあるのは、特定の専門家たちに対する不信である。こうした事実がすべての専門家に対する不信という観念へ滑ってしまっていることが、議論にひとつの混乱を招いている。したがって、我々が信頼する専門家もいれば信頼しない専門家もいるという明白な事実を指摘すれば混乱はなくなるとも思われよう。専門家システムへの信頼を否定しているという事実そのものがないと示せるからである⁽⁴⁾。しかし、そうした事実を示しても、専門家システムを信頼しなければそれだけ民主的になるのだという形で、観念の混乱は残るのである。たしかに事実として専門家がすべて信頼できないとなれば、やはり民主的であるとは専門家を信頼しないことだとの思いが強まるであろうから、その意味では、事実をめぐる混乱が観念をめぐる混乱を補強してはいる。しかし、事実の混乱を絶っても依然として残るという意味で、むしろ観念めぐる混乱が大きいのである。したがって以下でも、事実とのつながりの中で少なからず観念の分析治療を施すことになるだろう⁽⁵⁾。

検討すべき問題は三つある。まず、信頼するとはどういうことかである。次いで、専門家システムとは何か、専門家とは誰のことかという点である。そして、民主的であるとは自己決定的であることだと言うときのその意味である。以下において順次それを検討することにするが、その前に、今日の議論の混乱を引き起こし、結果として専門家システムへの不信だけを助長するのに加担してきた一つの有力な論調をみておきたい。いわゆるテクノクラシー論である⁽⁶⁾。

1. テクノクラシー論とその混乱

今日、我々の社会は高度な科学技術知識を用いるようになった。ところが他方で、我々現代人は個人としてはしだいに無知になってきてもいる。「無知」を、有用な知識を理解できない度合いによって測るとすれば、有用な知識が急増しているがために、「相対的な」無知が増大していると言えよう。事実、我々は毎日、現代技術の産物、多種多様の製品を使っているが、ほとんどその仕組みを知らない。科学技術に完全に依存しながら、だが科学技術に心を閉ざして、人々は「都会的野蛮人」の生活を送っている。そう言われてきた⁽⁷⁾。

しかしだからこそ、各分野ごとにそこでの問題を熟知している専門家がいます。知的分業が行われ、それらがうまくつながって社会全体は首尾よく機能していると皆考えている。だから専門家に相談し、そして自分達の問題の管理を任せている。しかし実はこうすることで、我々の無知、無能化がさらに進んでいるのではないか。なぜなら、今日の社会ではすでに、専門家たちのやっていることは、相談を受けた問題に解決策を提供するという範囲を越えているからだ。そもそも何が問題なのかをよく知っているのは専門家である。その問題の解決策をよく知っているのも専門家である。そして、その解決策の効果、適切さの評価法をよく知っているのも専門家である。この点では、医者と患者の関係がひとつの例になる。科学技術が複雑になるにしたがって、ますます専門家たちが我々の知らない専門知識を用いて、我々の知らない、気付いていない問題を指摘するようになっていく。そしてそれは期待されてることでもある⁽⁸⁾。しかしこうした状況の下では、人々は自分にとっての必要、問題が何であるかも自分では決められず、ましてその解決方法も知らず、しかも自分が果たして適切に援助されたのかもよく判らない無能な者になりつつある。専門家に任せることで、こうして三重に無能化され、ますます専門家に従属せざるを得なくなる⁽⁹⁾。ここには、自己決定権（すなわち人権）をもった市民はいない。自分にとって必要なことは自分で決め、その解決策もいくつかの中から自分で選択でき、そ

の結果も自分で評価できる、そうした自立した市民のありかたは難しくなっている。したがって、自立した市民の間で行われる利害調整が民主政治なら、科学技術が進むにつれて、デモクラシーは弱まって行くおそれがある。我々にはもはや専門家の操作の対象にすぎなくなる。そこでは政治は、専門家の指示に従って社会問題を解決するという形で、ひとつの技術になってしまう。これが、いわゆるテクノクラシーへの危機と言われてきたものである⁽¹⁰⁾。問題は、専門家を信頼すること、専門家に自分達の問題の管理を任せていることにある。そのことが専門家への従属を招き、自己決定権を骨抜きにして、民主政治を危うくしている。したがって逆に、我々の社会が民主的であるためには、まず専門家でない人々の自立、その自己決定権を回復し、専門家への従属を拒否して、自らの問題を自らの手に取り戻さなければ、つまり専門家を信頼しそれに任せることをやめなければならない、と言われる。そしてまさに専門家に任せることをやめるために、科学技術者との間の専門知識のギャップを少しでも少なくすることが必要だと言われてきた。事実二つの方向でその必要が主張されてきた。ひとつは、科学技術者・専門家の活動とその情報の公開を進めていく必要である。そして自らそうした情報を公開し、専門家でない人々に説明することが科学技術者の社会的責任でもあると議論されてきた。もうひとつは、現代の科学技術の高度の専門性という条件の下で、そうした科学技術情報の公開を実質的なものにするために、専門家でない人々の科学技術に関するリテラシーを高める必要である。また、それを高めることが科学技術時代に生きるすべての人々の責任でもあると言われてきた。そしてここでは、専門家の持つ科学技術情報が公開されればされるほど、また、それを理解できる非専門家である人々のリテラシーが高まれば高まるほど、我々の社会は民主的になることが意味されているのである。

しかし、この議論にはまずすぐに気がつく混乱がある。専門家と非専門家を截然と分ける二分法である。そして、専門家に信頼を置き任せることが、専門家への従属を招いているというそこでの議論を事実上支え強めているのは、この二分法である。つまり、あたかも二人の人物について語るかのように、専門

家である人々の総体と非専門家である人々の総体を対峙させ、その間に信頼の、そして信頼せざるを得ないという関係を考える。その結果、信頼するということが何事かを任せることである以上、その限りで、非専門家である人々の専門家である人々への従属を招く、とみなすことになる。しかし、こうした二分法は単なる事実誤認である。総体としての専門家などどこにもいない。それゆえ我々が信頼しているのも、またそう言いたいのであれば従属しているのもそんな幻ではない。むしろ我々が信頼しているのは、自らもその内にある専門家システムと言うべきものである。そこにあるのは、特定の問題ごとに成立する専門家／非専門家の微視的な関係の総体としてのシステムである。そして以下で次第に明らかになるように、そうした専門家システムを信頼することは、そのまま個人としての個々の専門家を信頼することでもない。したがって、総体としてであれ、個人としてであれ、そうした（擬）人格としての専門家を信頼することではないのである。それゆえ、もしテクノクラシー論の主張がこの間にある相違を曖昧にすることで成り立っているのであれば、それを、今日の我々の生活がそれに依って成り立っている専門家システムへの信頼にも適用することができるかは、そもそも疑わしいのである。

問われるべきは、専門家システムへの信頼と専門家への信頼の異同を明らかにしたうえで、なおかつ、専門家システムを信頼することが、専門家システムへの従属を招き、自己決定権を骨抜きにして、民主政治を危うくしている、というようなことが言えるのかである。以下、先に示した三つの検討課題を明らかにすることによって、これに答えてゆきたい⁽¹¹⁾。

2. 信頼すること

すでに指摘した混乱ほど気付きやすいものではないが、テクノクラシー論をもっともらしく見せているもうひとつの理由として、信頼するということについてのある不適切な理解を挙げることができる。つまり、仮にいま専門家システムへの信頼と専門家への信頼の違いを問わないとしても、専門家を信頼する

専門性の擁護（木原）

ということが、この場合たとえ限られた事柄についてであっても、なにか専門家に全てを任せること、その事柄について全面的に依存することであるかのようには語られている点である。このことが、専門家を信頼しそれに任せることがその限りで専門家への従属を招くことになるという、そこでの議論のもっともらしさを支えている。しかし、信頼するとはそもそも全てを任せることではないのではないか。改めて、信頼の基本的場面にまでさかのぼって検討してみなければならない。

そもそも人は、自らの人格の明確な同一性や自らの行為を取り囲む社会的物質的環境の安定性を確信し、（存在論的）安心を得てこそ生きることができる。しかしそうした確信を、時空的に連続していることの認知で根拠づけようとしても、できることは少ない。むしろそうした確信は、相手が（自分とは）独立した経験をしているものであるにも関わらず、それゆえ（自分との間に）時空的な断絶、不在があるにも関わらず相手の思いやり・好意は連続しており、したがって同じ好意をもって戻ってきてくれると信じられること、つまりそうした他者の一貫した行動に対する基本的信頼に根差している。事実、E.H.エリクソンが指摘するように、幼児は親の愛情ある一貫した行動を信頼し、それが信頼に値することを学ぶことによって、自分自身が信頼に値するものであることをも学び、自己の安定したアイデンティティの基盤を作っていく。他者が信頼できることで自分を信頼できるのであり、また、自分が信頼できることで他者を信頼できる。関係はあくまでも相互的である。そしてそれは幼児に限らない。なぜなら、こうした他者の行動に対する基本的信頼が裏切られたとき、人は置き去りにされたという思いの中で、生きる上での激しい不安におそわれ、時に、自らの安定した人格をもはぎ取られ精神を病む。その限りで、他者の行動に対する基本的信頼への欲求は生涯を通じて満たされ維持されなければならないからである。事実、我々の日々の生活は一見こまごました型にはまった行いを互いの間で繰り返しやりとりすることからなっているが、こうした型にはまった相互行為のもつ予測可能性こそが、そうした基本的信頼を再確認、再強化させ、その中で我々は安心を得て生きている。また、そうした安心を確保するために、

絶えず我々は型にはまった行いのやりとりがうまくゆくよう互いに注意，配慮を欠かすことはない。例えば，日常会話の些細な型でさえそれを無視すれば，いかに相手に，不信，反感，傷心という形で不安を引き起こすかは多くの実例が示している⁽¹²⁾。つまり，基本的信頼はそれが他者へのものであるゆえに崩れ得るのである。しかしだからこそ，我々は日常の型にはまった相互行為の中で，基本的信頼を維持し手入れしていく技を学び続けてもいる。E. Goffmanの指摘した，儀礼的無関心はその一例である⁽¹³⁾。

こうして，幼児にとっての親，また日常の習慣的行為の相手などという意味で，他人の行動の一貫性が信頼できるかが人として生きていく上で基本的であることが判る。そしてこうした基本的な信頼があることは人間社会の特質としてほとんど普遍的なものだろう。信頼なくして社会は成り立たないのである。もちろん地域と時代の違いに応じて，各々の社会は上述の基本的信頼から派生した固有の社会的信頼関係を作り出してきた。しかし先取りして言えば，いずれの場合もそこに見られる信頼（関係）には共通した性格があり，したがってそれは上述の基本的信頼のあり方の中にすでに現れてもいる。

それはまず，信頼というものが，とくに時間的または空間的にここに居合わせていない物事に関係して現れるという点である。その人の活動が絶えず目に付くところにあり，思考過程がすぐ見抜ける人をことさら信頼する必要はない。親に対する幼児の基本的信頼も，親が目の前にいないことがその愛情の取り消しを表すものではないとの確信に依るのである。もちろん，相手が目前に居合わせればその思考過程が見抜けるかといえ，それはまた別のことである。日常の習慣的行為についての例が示す通りである。従ってむしろ一般的には，信頼は，それについて必ずしも十分な情報がないものに関係して現れると言うべきである。その働きに完全に精通している物事ならそれをことさら信頼する必要もないのである。不完全にしか理解してない，またし得ないからこそ信頼するという逆説的な事態がここにある。

ここからまた，信頼とは必然的に一種の信仰であることが判る。幼児は親の愛情ある一貫した行動を確信するが，そこに根拠などない。同様に，我々が日

常の習慣行為の中でもつ他人への信頼にも根拠はない。事実、そうした基本的信頼は、我々を不安から開放し安心を与えてくれる一方で、そうした信頼が崩れ得るものであるだけに、我々はそうならぬようますます一抹の不安と緊張の中で様々な工夫を凝らしながら他人への信頼に賭けているという、アンビバレントなものなのである。したがって、たしかに信頼は信仰ではあるが、それは決してあるものへの全面的な依存、委任ではないのである。あるものへの信頼と懐疑、安心と懸念はそもそもが不可分なのである。また、習慣行為の例が示しているように、信仰と違って信頼は必ずしも意識的なものでもないのである。

こうして、社会の中で人が安心を得て生きていくためには、他人の行動を基本的に信頼しまたその信頼が満たされることが、不可欠であることが判る。そして、我々がこうして他人の行動を基本的に信頼するのは、まさに他人の行動がそもそも不十分にしか理解し得ないものだからである。しかしそれゆえに、この不可欠である他人の行動に対する基本的な信頼は崩れ得る。信頼とはつねに、そうした事態への懸念、疑いと一体なのである。だからこそ我々は、この不可欠である他人への信頼が本当に信頼に値するものであるかを評価し、チェックして、それを維持していく工夫を、たとえそのあり方は多様であるにしても、欠かさないのである。その意味で、あるものを信頼するとはそれに全てを任すことではない。信頼とは、任せることと任せないことの間にある。したがって、ある事柄について人を信頼している、また信頼せざるを得ない以上、その事についてはその人に全て任すべきだとか、任さざるを得ないと言うことは、事実誤認という意味で誤っている。と同時に、逆に、人を信頼することは、ある事について全て任すことだからその限りで従属を招くと言うのも同じ意味で誤りである。むしろ、全て任すことだと誤解することが従属を生むのであって、信頼することが従属を生んでいるのではない。

では、こうした性格があらゆる信頼（関係）に共通すると本当に言えるのか。今日の我々の社会生活のなかで信頼（関係）が具体的にどのような形をとって現れているかを検討することで、この問いに答えることが次の課題となる。

3. 専門家システムへの信頼

他人の行動の一貫性に対する基本的な信頼が人間社会の特質としてほとんど普遍的なものだとしても、どのような人々との、どのような形での社会的な結び付きを頼りにするか、言い換えれば、社会的信頼関係をどの様なものとしてつくり出していくかは、各時代、地域毎に固有の形をとってきた。

例えば、すでに述べたように、他者の行動に対する基本的信頼への欲求は生涯を通じて満たされ維持されなければならないのであるが、近代以前の社会においては、この必要を保証する制度上の安全装置を、組織化された宗教のなかを求めることが顕著であった。しかし今日、我々のほとんどは、もはやこうした信仰を同じくする者との、組織化された信徒集団という形での社会的結び付きを信頼して生きてはいない。では、いま我々がつくり出している社会的信頼関係にみられる顕著な特徴とはどの様なものなのだろうか。

それは、専門家システムへの信頼である。我々は、銀行で金を出し入れしたり、なにげなく電気やガスをつけたり、手紙や電話をかけたりする度に、貨幣・金融システム、電気・エネルギーシステム、郵便・通信システムなど、近代の社会生活を可能にしている様々な専門家システムを信頼し、それとの間で型にはまった習慣的なやり取りをするなかで、そうした専門家システムへの信頼を再確認しながら、安心を得て生きている。では、こうした専門家システムへの信頼も、信頼（関係）としての共通の性格を持つ⁽¹⁵⁾のだろうか。

専門家システムへの信頼は、まず、信頼というものがそもそも持っている、とくに時空的に居合わさない物事に関係するという特徴を非常に拡大した形で示している。いま、出勤のために車に乗り込むことを考えてみる。毎朝繰り返されるそうした習慣的な行為の前提には、企業でのこの車の製造工程とそこでの品質管理や、設計や開発過程、さらには大学などでの関連する基礎科学研究過程というふうに様々に繰り返り広げられている、しかし自らはそこに居合わすことのない社会関係への信頼がある。ただし、同じく、居合わすことのない物事

への信頼といっても、前節で見た他人の行動に対する基本的信頼というものが、たとえ不在があっても繰り返し戻ってくるような、相手との直接顔の見えるやりとりのなかで信頼の証しを確かめあうことで成立しているのと、当然ながら事情は異なっている。専門家システムへの信頼の場合、信頼される社会関係が広範囲に拡大しているため、そうした社会関係のなかにいる人々と直接出会い、その行動の信頼性を確かめ合うことがかならずしも信頼の成立の条件とはなっていない。

むしろ専門家システムを信頼すると言うとき、我々が信頼しているのは、そうした社会関係の中にいる個々の人物とその行動ではなく、それらの人々が用いる専門的技術であり知識である。我々は、自分のこの車を製造した特定の組立工、またそれを設計した特定のエンジン技術者その人とその行動を信頼しているわけではなく、それらの人々が体現する組み立て技術、エンジン技術を信頼しているのである。言い換えれば、その組立工が誰であれ、またその組立工が組み立てた車がどれであれ、それにはかかわりなく、専門的な組み立て技術を持った組立工が車の製造工程に関わっているという、そうした社会関係を信頼しているのである。つまり、標準化され、規格化された技術・知識とそれに基づく社会関係、その意味で広範囲に拡大しており、したがって自ら居合わすことのない社会関係への信頼が、専門家システムへの信頼を成立させている。事実、技術・知識が標準化されていなければ、その時こそ、誰がそれをやったかが、したがってその人物との直接顔の見えるやりとりのなかで信頼の証しを確かめあうことが信頼にとって重要になる。例えば、今日この国の医療では、医療内容の標準化が不十分なゆえに、いまなお担当の医者が誰であるかが少なからず重要なのである⁽¹⁶⁾。

こうして、近代の社会生活を可能にしている専門家システムへの信頼もまた、それが自ら居合わすことのない社会関係への信頼である以上、信頼の持つ一般的な特徴、つまりそれについて必ずしも十分な情報がないものに関係して現れるという特徴を共有している⁽¹⁷⁾。しかも今日、それは、たんにそれに止まるものでもない。つまり、まさに技術・知識の標準化が進むことによって、技術・知

識の生産の場も広範囲に拡大し、その結果、周知の通り近代の専門家システムを支える技術・知識の量は膨大なものとなっている。したがって今日、我々が専門家システムを信頼する時、我々はこの膨大なそれゆえ自らほとんど知らない、また知り得ない技術や知識を信頼しているのである。この意味でも我々の日常生活は再び、それについて必ずしも十分な情報がないものへの信頼によって成り立っていることが判る。

こうした事情は、今日を生きるすべての人々にとって同じである。誰もが限られた事柄についての専門家でしかない以上、誰にとってもその生活を可能にしている専門家システムは不透明である。ただしここで、自らが専門家としてその一端を担う専門家システムと、自らは非専門家としてその外にある専門家システムの間に、再び二分法を持ち込まないように注意したい。その間に明確な境はないのである。そもそも、自らが一端を担う専門家システムといえども、そのシステムの大部分は前述の二つの意味で、自らにとって必ずしも十分な情報がないものとして現れている。つまり、まずそれ自体がひとつの、標準化された技術・知識とそれに基づく自ら居合やすことのない社会関係であり、加えて、それはすべての専門家システムとつながっているからである。例えば、ある科学者が自ら従事している科学知識生産の専門家システムも、自ら居合やすのはその一部であり、またそれは教育、産業、経済、政治などの、それについて自らほとんど知らない個々の専門家システムと相互に依存し、ときに浸透し、影響しあっている。それゆえ、そこに、ある人にとって透明なシステムと不透明なシステムを分ける境はない。誰にとっても、全ての専門家システムがそれぞれ程度の違いこそあれ不透明なのである。⁽¹⁸⁾

そして、こうした不透明さ、つまり情報の欠如があるからこそ、我々は自らもその内にある専門家システムのつながりを信頼するのである。この専門家システムのつながりについて十分な情報を持つ者としての専門家などどこにも居ないからこそ、誰もが専門家システムを信頼することに賭けているという逆説的な事態がここにもある。しかしそれゆえに、こうした専門家システムへの信頼も当然崩れ得る。またそうだからこそ我々は、この専門家システムへの信頼

が本当に信頼に値するものであるかを評価し、チェックして、それを維持していく工夫を、絶えず欠かさないのである。その限りで、専門家システムへの信頼も、信頼（関係）としての共通の性格を持つことに変わりはない。

違うのは、それを維持する仕方である。専門家システムへの信頼が、専門家個人への信頼とは異なるものである以上、他人への信頼を維持する場合のように、直接顔の見えるやりとりのなかで信頼の証しを確かめあうことが、専門家システムへの信頼の証しを与えるわけではない。では、専門家システム、すなわち、標準化された技術・知識とそれに基づく社会関係を維持するために我々が欠かさずにしていることは何か。それは、専門家システムのそうした働きを絶えず確認しつつ維持していくような、チェック・評価システムをもうひとつそれに重ねることである。例えば、専門的な組み立て技術を持った組立工が車の製造工程に関わっているという、そうした社会関係を維持するためにも現に様々な評価システムが働いている。企業や職能組合による仕事の管理・評価というような、この専門家システムを担う専門家たち自身によるいわゆる内部評価から、市場による企業やその製品の評価、法による規制といういわゆる外部評価まで、異なる基準に基づく多様な評価システムが働いているが、それについては改めて言うまでもないだろう。そして、すべて専門家システムはつながっており、それゆえ誰にとっても、自らが担うシステムを含めそれぞれが程度の違いこそあれ不透明である以上、そうした専門家システムが本当に信頼に値するものであるかをそれぞれの立場から評価し維持していくこうした評価システムも、全ての専門家システムに内部、外部からかぶせられている⁽¹⁹⁾。

この意味で、専門家システムとその評価システムとは不可分なのである。それは、そもそも信頼と懷疑が不可分であることの現れである。もちろん、評価システムと、それによって評価される当の専門家システムが同じ一つのシステムをつくるか否かは様々である⁽²⁰⁾。しかし、今日の我々の生活を支えている専門家システムという社会的信頼関係のもつ性格からして、専門家システムは、その内部、外部からを問わずそこに重なってくる、異なる基準に基づく多様な評価システムなしではもともと機能しないのである。

したがって、例えばアカデミズム科学という専門家システムが、従来の、普遍主義、公有主義というような内部規範に支えられた同僚評価システムだけでなく、今日、外部社会の評価システムへと開かれる方向へ動いていることも、アカデミズム科学と外部社会との関係の緊密化という事実を背景として、むしろ専門家システムへの信頼を強化する動きなのである。もちろん、従来のもっぱら新しい真理の生産を保証するための同僚評価システムに加えて、それとは必ずしも一致しない、例えば人権の保証のための評価システムを導入することによって、もはやアカデミズム科学もそのままではありえない。しかしこのことは、専門家システムとしてアカデミズム科学を再編成することでこそあれ、それが専門家システムであることを否定することではまったくない。

事実、クローンニングなど、遺伝子操作を含む生殖に関わるアカデミズム科学内での研究に、今日では、農畜産業や医療の観点をはじめ、法的、倫理的観点というように、外部社会から多様な評価システムが重ねられてきている。しかし、そうした評価システムが新たに工夫し導入しようとする（メタ）ルールと、従来からの同僚評価システムの（メタ）ルールは必ずしも一致しない。そこで、当の研究者たち、産業家、医者、法律家、宗教家などそれぞれの評価システムを担う専門家たちの間で、アカデミズム科学研究という専門家システムを動かす（メタ）ルールの調整が行われてきた。さらに、そうした専門家の間での不一致、すなわち、それぞれが担う評価システム間の不一致を調整するのに、陪審制度にならって、いかなる専門家システムの担い手でもない者としての非専門家、つまり誰もが持っている生活者の立場を期待された人々が参加することも工夫されてきた。しかし、こうした試みもすべて専門家システムを維持するための工夫である。つまり、誰にとっても自らにとって必ずしも十分な情報がないものとして現れているアカデミズム科学という専門家システムが、本当にある標準化された技術・知識・方法とそれに基づく社会関係として信頼に値するものであるかをそれぞれの立場から評価し、チェックして、それを維持していこうとする、あくまでもそうした工夫にほかならないのである。

4. 民主的であるために

こうして我々は、絶えず専門家システムに評価システムを重ねてきた。また、それ以外に我々にできることなど初めからないのである。そして、そうした評価システム自体がもうひとつの専門家システムとさえなって、さらにそれが評価システムを必要とするのである。専門家システムを信頼するとはそもそもそうしたことであり、それへの絶えざる評価、チェックと不可分なのである。そしてそうである以上、専門家システムを信頼することが専門家システムへの従属を招くとは言えないのである。したがって、こうした議論によって成り立っている、先に述べたようなテクノクラシー論も誤りだということになる。専門家システムを信頼することが専門家システムへの従属を招き、人々の自己決定権を骨抜きにして、民主政治を危うくしていることなどないからである。結局、我々の社会が民主的であるとは人々が自己決定権を持つことだとたとえても、そのために専門家システムへの信頼を否定する必要など何もないのである。

むしろ事は逆である。我々の社会が従属を退け、さらに民主的になることを目指すのなら、いまなすべきことは、まず専門家システムを確立することであり、そうした専門家システムのつながりの上に重ねる、チェック・評価システムの相互ネットワークをさらに拡げ強めることである。こうして専門家システムへの信頼を確保し維持することだけが、従属を避ける途だからである。そしてそのとき看過してならないのは、評価システムがもうひとつの専門家システムでもあることの重要性である。専門家システムへの信頼を、全てを任すことだと誤解することこそが従属を生むのであって、信頼することが従属を生んでいるのではないのである。したがって、専門家システムへの信頼を否定することは、ときにかえってそれへのチェック・システムづくりを妨げ、従属を強めかねないのである。

にもかかわらず、いま我々の社会を覆う、科学技術を含む専門家システムへの不信の高まりはなぜなのか。おそらく、民主的であるとは人々が自己決定権

を持つことだという今日広く見られる観念、これを巡って生じている混乱にその一因がある。つまりそこにあるのは、全ての情報が開示され、それを理解した上での自己決定をあくまで目指すべきであるとの了解なのである。そして、自己決定をこう理解する限り、民主的であるためには専門家システムを信頼しないことだとの結論になるのは、見やすい道理である。繰り返しのべてきたように、専門家システムを信頼するのは情報の欠如があるからだからである。したがってまた自己決定をそう理解する限り、専門家システムを信頼することが専門家システムへの従属を招くとは言えない、という先の結論も受入れ難いものとなる。いくら評価に評価を重ねたところで、それはあくまでも専門家システムを信頼に値するものとして維持してゆく工夫であり、また、そうした評価システム自体がもうひとつの専門家システムとさえなって、情報の欠如、不透明さが消えることなどない。である以上、自己決定は制約されており、その意味で従属を招いているとなるからである。

問題は、自己決定とは何かということである。我々の社会が民主的であるとは、そこに従属関係がないことであり、それは即ち、自己決定に制約がなく、自己決定的であることである。仮にここまでは良いとしよう。ところが、自己決定を真に保証するのは、全ての情報が理解できる形で開示されるときであり、また、こうした情報の完全な開示が、我々の社会における信頼関係の確立と不可分である、ととるところに混乱が生じる。そうではなく、むしろ情報の欠如が、我々の社会的信頼関係を成立させているのであり、そうした信頼関係の維持、確立には、それへの絶えざる評価、チェックが不可分であって、またそれだけが、我々の自己決定を真に保証するものなのだということ、本稿で述べたのはそのことである。

では、この二つのとりかたの間に実質的に何ほどの違いがあるだろうか。確かにどちらも、我々の社会が民主的であることが、我々の社会における信頼関係の確立と不可分であると言っている点では変わらない。しかし、そこで確立されるべき社会的信頼関係の中味は大きく違っている。一方は、社会関係を動かしている全情報が開示されることで確立される信頼関係を目指すから、そこ

では、専門家システムは必要悪として否定されてゆく。これに対し、本稿は、絶えず評価システムを重ねることで専門家システムを維持していくことが、我々の社会における信頼関係を確立していく途だと指摘したのである。この違いは、専門家システムは信頼できないからチェックが必要と考えるか、専門家システムを信頼するからチェックが必要と考えるか、たんなる信頼の意味のとり方の違いにすぎないと見えるかもしれない。本稿では、そうではないことを、信頼の基本的場面にまでさかのぼって事実をもって指摘したつもりである。

しかし、こうした混乱には根強いものがある。それを鎮めるにはさらに作業が必要だろう。情報の開示・公開と信頼関係をめぐる混乱を正すには、近代という社会における、個人への信頼とシステム・制度への信頼の異同とその間のつながりに立ち入ってのさらなる検討が必要である。また、専門家システムへの信頼を否定し、専門家システム自体を否定してゆくことが、今日我々の社会にどのような実害をもたらしているか、具体的に指摘することも必要であろう。これらの点については、稿を改めて述べることにしたい。

注

- 1 本稿は、日本科学史学会第44回年会・一般講演（1997年5月）において、「専門性の擁護——科学技術に対する市民の責任とは何か」と題して一部口頭発表され、STS Network Japan News Letter Vol.8 No.1, 1997にその要旨が発表されたものを、一部タイトルを変更し、内容を敷衍したものである。
- 2 この点については、拙稿「科学技術者の「社会的」責任は何处にあるか」『現代思想』1996年5月。本稿は、そこでの論点を別の角度からより明確化するとともに、そこで論じ残した問題へと検討を進める目的をもっている。
- 3 それへの批判は、例えば、山崎正和『近代の擁護』1994年、4、5章。
- 4 杉山滋郎氏の指摘による。
- 5 時にそうした箇所での議論は抽象的であることを免れず、一般に、抽象論はたんなる現実の正当化に堕してしまうおそれなしとしない。しかしテクノクラシー論をはじめ、批判すべき議論自体が、じつは事実から舞い上がってしまった観念が引き起こした混乱なのである。しかもこの混乱は実害を伴う。例えば、科学技術者には自らの持つ情報を公開する社会的責任があり、市民には科学技術リテラシーを高める社会的責任があると、見境なく言うことによって不安を煽り新たな混

乱を引き起こしている。そして、科学技術論者のなかにもこの混乱に巻き込まれていながら自覚的でない者がいる。ここから抜け出すには時に事実を照らしての観念の分析が欠かせないにもかかわらず、そうした作業を敬遠してしまうからである。

- 6 科学技術論もまた、科学技術知識の不確かさや、科学技術者・集団の不完全さをもっぱら指摘することで、不信の助長に加担してきたと言える。
- 7 オルテガ・イ・ガセット『大衆の反逆』1930年、9章。
- 8 しかしここには、自分たちのもつ知識が役立つことを示そうとするあまり、自分の知識が役立つ問題こそ、人々が真に解決を必要としている問題だとする傾向もある。専門家に都合よく問題が作られる危険がある。しかし我々がそれをチェックするのは難しい。専門家に依存することによって、もともとが単なる手段にすぎなかった技術の知識が、今や我々の（社会の）目的をも決めるようになってきたとも指摘されてきた。
- 9 イバン・イリイチのグループにこうした主張が見られる。例えば、I. イリイチ他『専門家時代の幻想』1978年、3章。
- 10 ここではテクノクラシー論の一類型を取り上げたにすぎない。テクノクラシーの意味の歴史的変遷については、例えば、中山茂「技術制度化の思想史」『岩波講座 現代思想 13 テクノロジーの思想』1994年。
- 11 以下2,3節の議論については、ギデンズの近代論に学ぶところが大きい。ただし、本稿での論点とギデンズの所論とは一致しない。例えば、A.ギデンズ『近代といかなる時代か?』1990年。
- 12 この点は、エスノメソドロロジー学派の仕事に詳しい。例えば、H. Garfinkel, *Studies in Ethnomethodology*, 1967, chap. 2.
- 13 E. ゴフマン『集まりの構造』1969年。
- 14 しかし他方で、信頼は、帰納的確信に尽くせぬ面も持つ。
- 15 ただし、専門家システムへの信頼には、対人的な信頼がもたらす関係の相互性が欠けていることに留意する必要がある。
- 16 今日の、医療不信の高まりもこの点に関わる。
- 17 専門家システムへの信頼が標準化された技術・知識に基づく社会関係への信頼であるという点は、こうした情報の欠如を補い、透明さを高める面ももっている。例えば、エンジン技術者は自ら設計に携わっていない何時何処で設計されたエンジンにも、標準化された技術が使われていることを確信できるからである。しかし、そこでの技術・知識の全てが標準化し得るものでもないし、標準化された技術・知識が実現しているかにも不確かさは残る。その点で、自ら居合わせるのではないそうした社会関係としての専門家システムへの信頼が、情報の欠如に関係して現れていることに変わりはない。

- 18 もちろん、すべての専門家システムはつながっていると言っても、その具体的なあり方は、地域と時代に固有である。ただし、この点を認めた上でなお、今日すべての専門家が、自分がその一端を担う専門家システムといえども不透明であることをはっきりと自覚することが重要である。そうすることではじめて、すでに「専門家」という用語のなかで衰弱しつつある批判的懐疑主義を、以下に述べるような評価システムの拡充という、あらたな形で回復させることができるだろうからである。
- 19 ここから判るように、科学技術を含む専門家システムという社会制度が成立するには、技術、知識が標準化されていなければならないが、そのとき、標準化の物差し・基準をどう採るかに当の専門家システムの内外の多様な社会的利害が反映される。したがって松本が指摘するように、科学技術と社会の相互関係を利害関係主体の交渉過程とみなしつつそれが科学技術の制度化の度合いに応じてどの様になるかが、今後の科学技術の社会学の課題であるとすれば、そこでは科学技術知識の標準化過程の検討が一つの焦点になるだろう。先に、拙稿（注1）で、科学技術者の社会的責任に関連して、自らの属する組織に対して責任を果たすことが、外の社会に対する責任を果たすことにもなるような社会制度の重要性を主張したのも、この点に関わる。松本三和夫「科学技術の社会史・社会学」、『思想』No.870、1996年12月。
- 20 本稿では、システムとは、要素の数や種類ではなく、要素間の関係が同じ集まりを同じ集まりと見なしたものの定義を採っている。そして、この要素間の関係・構造を規定するのがルールとしての情報である。例えば、DNA上の情報に基づいて、要素としてのアミノ酸が配列され、ひとつのシステムとしてのタンパク質分子が決定される。専門家システムの場合、そのルールとしての情報は標準化された技術・知識、方法などであり、それに基づいてそこでの個人の社会的物質的環境との関係が決まってくる。そして、そうしたルールと、それを守り維持するためのメタ・ルールが一緒になってはじめて、社会関係としてひとつの専門家システムが機能する。システムのチェック・評価とは、そうしたメタ・ルールを導入することであり、ときにはそれに伴って新たなルールを導入することでもある。また、そうしたチェック・評価を行うのが評価システムである。